人間性の涵養（二）

倉橋惣三

人間性とは、人間が人間を感ずることをいう。人間を感ずるとは、人間どうしが、対者のこゝろもちを共感しあうことである。共感（ミットフューレン）するというよりは、対者の感情状態に同ずるのであつて、有意的にするとかしないとかいうのでなく、同じ感じになるのである。それも理解を待つのでなく、物質に温度の伝導がある如く、人間どうしのこゝろもちの伝導である。但し物質に伝導に良否がある如く、人間にこゝろもちの伝導に良否がある。人間的伝導の良否が人間性の敏鈍である。最も非伝導の場合、つまり非人間的非人情といわれるのである。

非人情は、文学や芸術の世界においては、わざとその境地に身をおくこともあり、また、科学の世界においては、それを必須とすることもある。しかし、人間的の交渉においては普通あり得ない生活ともいえる。たゞ、その相互の関係において、極めて無関心の態度ということはある。それも、その相手に対する特殊の理由によつて、人間性の冷却される場合のことである。時としては、無関心の奥に実は強き関心、余りに強き関心を蔵することさえある。敵意の如き場合である。即ち、相手のこゝろもちの反対のこゝろもちを楽しむ場合である。――相手が悲しきとき楽しい、相手が苦しいとき楽しいという類――これは人間性の皆無ではなくて異常である。

同情という言葉がある。多くは倫理的行為を意味するものであり、人間性の共感以上、何等かの自己犠牲を伴うものである。人間性の共感は、そうした倫理性を伴うことを、一般の自然とし、同情も亦、人間性の至当には相違ないのであるが、厳密にいえば、同情としての人間性は本元的のものといゝ難いところがある。同情に至らざる共感があり、時としては、共感のない同情もあるからである。

人間は同情せられることによつて、必ずしも同情心を養わ

れない。却て同情を要求する習癖を養われたりする。——人の同情にあまえる場合の如き——しかし共感せられることによつて他への共感が養われる。これ人間性の涵養という所以である。更に他人からの共感を得たことのないものは、共感性をもつことが少ない。幼にして人から共感される機会を欠いたものは、人にも共感することがない。

受愛の経験は人間性の基である。受愛は共感せられる経験だからである。しかし、受愛必ずしも人間性の純粋なるものでない。愛は必ずしも共感となるものでないからである。愛は屢々わがまゝであり、自己満足であつたりする。多くの場合、人は愛せられたい。しかし、愛せられたいこゝろもちだけのものでなく、愛せられることによつて得られる純愛以外の幸福、それは屢々物であつたり、特権であつたり、その満足は、必ずしも愛せられるこゝろもち、そのものでないことがある。そのとき、その経験は、屢々、共感せられる経験として、純なるものではない。その経験は、決して共感せられる経験でもなく、共感を養うものでもない。たゞ愛せられるときそのこゝろもちは最もよく共感せられるであろうことは確かである。人間性として、共感は愛より真実である。

幼児教育にあつて、愛せられる経験は、素より必要である。しかし、共感せられることは、一層必要だといえる。同情され愛される経験は、多くはよきことを伴う。しかし、人間性の上においては、共感せられることこそ幸福である。それは、人間性の最も純粋なるものを経験させられ、従つて、人間性を涵養せられるからである。

これを保育者の側として見れば、幼児のこゝろに同情し、幼児を愛することは、いうまでもなく保育の要訣である。しかし、その場合、その愛の真に純粋の愛であることを心しなくてはならぬ。愛は貴い。しかし、屢々誤るものである。共感の常に純粋なるに如かない。そして、その純粋の共感によつて、人間性を育くむものである。共感すべきこと、共感すべからざることの差はあつても、共感のないことは人間が人間に触れることではない。

道徳性は批判する。共感性は批判しない。あとでは批判するとしても、そのときは、批判などいう離れた態度、客観的態度を容れないのである。道徳性は批判し、また道徳性を養うためには、批判をする必要がある。しかし、人間性そのものの浸潤においては、批判といつた人間が人間を離れて見ることはないのである。

教育者は、幼児の生活行動に対し、良否の正しい批判力をもつものである。しかし、その良否を感ずることによつて、児童の人間性を涵養することはできない。児童自らが、自己の生活の良否を批判している場合でも、——道徳性の発達によつて、——それを忘れさせる程に濃かな共感性こそ、幼児保育者の人間性でなければならぬのである。